



植物展における海藻の展示 —国立科学博物館の場合—

北山 太樹

博物館施設で「植物」をテーマに展示が企画される際、海藻がとりあげられることは稀である。陸上植物の姿や生き方だけ紹介して海の生物には触れなかったり、一次植物の1系統に過ぎない緑色植物（それも主に被子植物）の多様性や系統関係を細かく解説する一方で、二次共生の生物は除外されることがほとんどである。原因は博物館に藻類を専門とする学芸員が少ないためであるが、それが市民から海藻への関心を失わせ、愛好家や研究者が育たない原因となり、ひいては海藻が展示されないという悪循環を産んでいる。恐竜や昆虫とまでは言わないものの、海藻の存在を国民に知っていただくことが、これからの自然史博物館の使命のひとつと考える。

本年7月10日～9月20日、国立科学博物館（上野）で開催された特別展「植物 地球を支える仲間たち」では、会場に陸上植物がひしめくなか、「光合成生物の系統進化」と題し海藻を陸上植物と対等に扱う巨大パネルを展示した。実は、こ

の特別展では緑色植物のみが「植物」と定義されたので褐藻などの出番はないはずだったが、色素体の共生進化を説明する名目で放り込むことができた。Burki *et al.* (2020) の新説もとりいれた系統樹を壁に描き、代表的な光合成生物としてスイゼンジノリ（藍藻）、トサカノリ（真正紅藻）、クロミル（アオサ藻）、シャジクモ（車軸藻）、ハイゴケ（コケ植物）、クレマチス（被子植物）、ワカメ（褐藻）の押し葉標本を配列した（図1）。隠れた主役は海藻で、陸上植物も海藻標本をつくる要領で作製したおかげで、顕花植物でありながら生きていたときの鮮やかな色が残り、想像以上の美しい出来となった。これらの体色の由来となる色素体の共生関係を解説するために手作りのアニメーションを添えた（図1右端）が、これが予想外に好評で、オンラインで公開することを検討している。

別のコーナー「本当は怖い植物たち」にも海藻を展示することができた。国際自然保護連合（IUCN）選定の侵略的



図1. 国立科学博物館特別展「植物展」. 押し葉標本とイラストで光合成生物の系統進化を示したコーナー.

来種ワースト 100」にもリストされる海藻イチイヅタ（アオサ藻）である（図2）。変異型の藻体を日本にも分布する野生



図2. イチイヅタの展示。右:「表」の野生型イチイヅタ（壁がやや手前にある）。左:「裏」の変異型イチイヅタ（奥にある）。

型と並べ、比較できるようにした。人為的な原因で凶悪化した生物の例が海藻にあることはもっと知られてよいと思う。

将来、「海藻」をテーマとした展示ができるなら、定義にこだわらず海産種子植物も加えたいと考えている。

最後に、系統樹の展示について貴重なご助言をくださった神戸大学の鈴木雅大博士にお礼を申し上げる。

引用文献

Burki, F., Roger, A. J., Brown, M. W. & Simpson, A. G. B. 2020. The new tree of eukaryotes. *Trends Ecol. Evol.* 35: 43–55.

(国立科学博物館)

【国立科学博物館地球館】

所在地: 〒110-8718 東京都台東区上野公園 7-20。開館時間: 午前9時～午後5時（金・土曜日は午後8時まで）。入館は各閉館時刻の30分前まで。休館日: 毎週月曜日（祝日の場合は翌火曜日）、年末年始（12月28日～1月1日）。入館料: 一般・大学生 630円（20名以上の団体 510円）、65歳以上18歳未満の方、障害者の方とその介護者1名は無料。2020年6月よりコロナ感染拡大予防対策のためオンライン（下記ウェブサイト）による事前予約が必要。交通: JR山手線上野駅公園口から徒歩5分。Tel: 03-3822-0111（代表）、03-5777-8600, 050-5541-8600（問い合わせ用ハローダイヤル）。URL: <https://www.kahaku.go.jp/>



カモガシラノリ語源補説

北山 太樹・宇井 晋介

紅藻カモガシラノリ（ウミゾウメン目コナハダ科）は、古来、紀伊（和歌山県）、安房（千葉県）で食された地方食用海藻である。その語源に関し、北山は昨年末に隔月雑誌『海洋と生物』（43年続いた老舗の雑誌。本年6月号を最後に休刊）に拙文「カモガシラノリの謎—地方食用海藻の魅力—」を執筆した（海洋と生物 42: 543–546）。すなわち、1890年に陶山清猷が『有用藻譜』で「かもがしらのり」の産地を「紀伊國西牟婁郡」としていることから、同地での褐藻カヤモノリの異名「おとめのかしら」と関連し、干潮に両種が丸い岩の上で群生する様子がそれぞれ鴨の頭と乙女の頭に見えたのではないかとする仮説である。

これに対し、仲田・鈴木（2021）による異説が前号本欄（藻類 69: 104）に発表された。吸い物などに入れる薬味を指す「香頭」の当て字「鴨頭」に由来するという説である。地産地消の食用海藻の多くと同様、カモガシラノリも吸い物に使われており、可能性のある新説である。

しかしながら宇井（2011）は、和歌山には「かもがしらのり」の他に「かものけ」という呼び名も伝わっていることを述べている（串本海中公園マリンパビリオン 40: 46）。宇井の祖母は明治半ばの和歌山県西牟婁郡の生まれであるが、カモガシラノリを「かものけ」と呼んで採集し、母（昭和6年生まれ）の代までは磯もののひとつとして時折食卓に載る食材であった。宇井自身、子供の頃は酢味噌和えで食した記憶がある。和歌山県に「かもかしら」だけでなく「かものけ」も伝わっていたことは、「鴨」は「香」の当て字ではなく、鴨の頭頂部に似たカモガシラ群落の外観に由来したという説を補強するものではないだろうか？（国立科学博物館・南紀串本観光協会）



カモガシラノリ。岡村金太郎著『日本藻類圖譜』第1巻第1集（1907）第9図版の原図より（国立科学博物館所蔵）。